

# 割烹着な人びと

めぐる冒険①  
わっぱりを



## 加藤ジャンプ

にカッコよかったのである。

ためしにスーパ―を物色した。エプロンは売っていた。しかし、ほとんどが胸まで隠れるタイプだった。そして、女性用とは明記されていないものの、昔の布団みたいに花柄があったり、刺繍が施してあったりする。それに、どうにもサイズが小さい。置いてあるもののなかでは、一番シンプルな、白っぽい、でもちょっとレースの飾りのついたものを試しに体にあててみた。やっぱり体に対して小さすぎる。鏡にうつった自分は、ネタが異常に小さい寿司みたいな雰囲気になっていた。ネタがエプロンでシャリが私である。こんなにシャリの大きな寿司は食べたくない。その様子を不審に思ったのか、暇をもてあましていたのか、店員さんが話しかけてきたのである。

「エプロンお探ですか」

見ればわかるだろう、と思ったが、口にも顔にも出さず、「はい」と返事をした。私は手にしたエプロンを元の場所に戻すと、だしぬけに、目についたあるものを手にしていた。ビニール袋に納められた割烹着であった。

「あ、割烹着もいいですよ」

ほんとうはエプロンが欲しかったのである。それなのに、店員さんはこう言った。

「似合うと思いますよ」

私は耳を疑った。

今年の春のことである。私は都内にある大型スーパーの、婦人服売り場と台所用品売り場の、ちょうど目線で呆然としていた。手にしていたのは、割烹着である。真っ白な和装用、ポリエステル65%に綿35%である。これが私に似合うというのか。

ある雑誌でイタリア料理を教わる（そして原稿を書く）という企画をいただいた。ついては、習っている様子も写真に撮るといふ。数年前に、同じように料理を教わり、写真にも撮られることがあった。そのときは編集者がエプロンを用意してくれた。上半身も隠れるタイプの、緑色のカッコいいエプロンであった。もしかししたら、また同じエプロンを用意してくれるかもしれない。でも、ちょっと違うのを着たい気がしていた。腰から下の前かけ型で丈の長いのがよかった。シエフっぽい。シャツの柄も見える。それに、料理研究家のコウケンテツさんが、そういう前かけをしていて非常

「なるほど」

素材などをたしかめてみると、店員さんは言ったのである。

「似合うと思いますよ」

「え？」

店員さんは笑顔である。私は、ちょっと哀しくなった。サイズがMである。レースが施してあるから、おそらくご婦人用と解釈した。そのMサイズなら私には絶対に小さすぎる。しかし店員さんに悪気はないのは、その口調からじゅうぶんうかがえた。彼女はおそらく、私が、私のためでなく、誰か女性のために物色していると解釈しているのかもしれない。ただ、一瞬、アレコレ考えたせいで、妙な沈黙が生まれた。この「間」が耐えられないのである。ジリジリしたこの「間」。埋草に、私は、なんとなく聞き返した。

「誰でも似合うのですかね」

店員さんが言ったのである。

「日本人には似合うんじゃないでしょうか」

日本人には似合うのか。そうなのか。

「外国の人はどうでしょうか」

「サイズさえ合えばいけると思いますよ」